

万博公園アートプロジェクト「未来記憶圏からの目覚め」

一場の記憶を現代に活かす試み

谷 悟

はじめに

2009年8月8～9日及び12月20～24日まで、万博記念公園（自然文化園 太陽の広場・東大路・上の広場）において、「万博公園アートプロジェクト 未来記憶圏からの目覚め」を開催した。本企画は、日本万国博覧会記念機構・大阪芸術大学の主催により実施したものである。

この取り組みは、「イルミナイト万博2009」のメイン企画として展開された。制作は大阪芸術大学万博公園アートプロジェクトコミッティが行い、大阪芸術大学の芸術計画学科、映像学科、工芸学科（ガラス工芸、金属工芸、陶芸、テキスタイル・染色の全コース）、演奏学科（管弦打コース打楽器専攻）、大学院（芸術研究科工芸領域、同作曲領域）、通信教育部建築学科の教員及び学生有志、卒業生などの約200名が参加した。

私は総合ディレクターを務め、グランドテーマの設定及びクリエイターの選出、展示スペースの検討から広報・運営まで、アートプランニング／マネジメント業務全般を担当した。本稿では、実施概要を報告するとともに、この実践を通じて導き出されたアートプロジェクトの可能性について見解を示すものとする。

1. コンセプト「《未来記憶圏》だからできること。」

1970年、大阪・千里丘陵にわが国のエネルギーを集結させた「日本万国博覧会」が開催された。それは、ありったけのテクノロジーを駆使して未来を見つめた壮大なドリーム・

プロジェクト⁽¹⁾であった。閉幕後、パビリオンは次々と壊され、緑豊かなコミュニティ・スペースとして親しまれるようになったが、そこはまだ“日本でいちばん未来を夢見た”気配を漂わせているのではないかと考えた。私はそれを《未来記憶圏》と名付けることとした。

輝かしい歴史のなかでシンボリックに存在していた太陽の塔は、いつの間にか“懐かしさの象徴”となった。ほつりと寂しげに佇むその姿からは、あらゆる束縛をはねのけようとする強靱な力が色あせてしまったように感じずにはいられなかった。

また、「EXPO'70」当時に誰もが信じて疑わなかった“明るい未来”の到来は、技術革新を重ねることで、かなりの進歩を成し遂げたが、同時に世の中を疲弊させてしまったことも否めないだろう。厳しい時代が続く今だからこそ、あらゆる世代が一緒になって、次代を拓く新しい夢を紡ぎ、未来へ希望をつなぐことが極めて大切ではないかと考えた。

万博を通じて問いかけられた数々のメッセージは、現代（いま）を生きる私たちにどう響くのか。そしてまた、これからの未来をどう生きるべきか。太陽の塔を囲み、或いは未来へと続くプロムナードの光に包まれながら、来場者が思索を重ねることを企てた⁽²⁾。

本プロジェクトは、〈夏〉と〈冬〉、2つの季節をつなぐかたちで展開したが、上記のグランドコンセプトをもとに、季節ごとに視点を変えたテーマを設定し、〈夏〉と〈冬〉で異なったメッセージを発信できる空間を創出した。

①〈夏〉のテーマ

「太陽の塔と私」をテーマに、太陽の塔との出会いを思い

出すことで、太陽の塔がそもそもどんな存在なのかを考える機会を創出する。万博当時を知る人は、その頃を思い出し、今回はじめて出会った人は新鮮な気持ちで太陽の塔に呼びかけてもらうなど、あらゆる世代が集う万博記念公園の特性を活かしたテーマをもたせた。世代が違えば、太陽の塔や万博に対する想いにもギャップが発生する。特に、万博を知らない世代にとっては、太陽の塔にリアリティを感じず、過去の遺産としての捉え方しかできない場合もあるということに注目し、「太陽の塔」の存在意義を今一度自らに問いかける機会をもってもらいたいという考えのもと、表現を構築した。

②<冬>のテーマ

<夏>の続編として、太陽の塔を「未来記憶圏」から目覚めさせ、現代(いま)を生きる人々の暖かい夢と新しい希望を託すことで、未来へとつながるエネルギッシュな太陽の塔を甦らせようという考えのもと実施した。テーマを「新しい夢をみる」とし、過去の象徴ともいえる太陽の塔を、わたしたちの夢見る想いによって未来へと夢や希望をつなぐ新しい存在へ変化させたいと考えた。

70年代の万博のころとはまた違った、この時代ならではの未来に対する熱い願い(エネルギー)は、太陽の塔をリフレッシュさせ、新たな人々の想いを漲らせ、太陽の塔をこれからもシンボリックに輝かせることのできる仕掛けとなるよう想いをこめた。

2. 作品概要

<夏>と<冬>に共通する試みとして、QRコードより取得したアドレスにアクセスすると、太陽の塔へメッセージを送信できる仕組み⁽³⁾を採用した。携帯電話から送られたメッセージが、ほぼリアルタイムに太陽の塔に投影されることで、太陽の塔に話しかける感覚を味わうことができる。また、映像学科の学生による色鮮やかな映像作品が、同時に上映され

ることで、普段とは違う太陽の塔を表出させた。加えて、太陽の塔前の芝生部分にLED照明を利用したイルミネーションを設置した。夥しい数のLED照明がついたコードを、縦横に張り巡らせることで、奥から手前に向けて徐々に拡がるパースペクティブ感を演出するとともに、来場者と太陽の塔をつなぐという視覚効果をねらった。

①作品構成<夏>

<夏>は開催期間が2日ということもあり、太陽の塔への映像投影とライブパフォーマンスを組み合わせたシンプルな構成とした。

太陽の塔の胴体部に、ムービングビデオプロジェクター6台を用いて投影した映像作品は、万博モチーフを素材としたアニメーションのほか、アーカイブ映像などをアレンジしたもので、万博開催当時へと来場者を誘いつつ、新しい感覚で万博をとらえ直す作品となった。桜をテクノロジカルにデザインした万博のシンボルマークを回転させた作品や、太陽の塔の顔が上から下へとひらひらと落下していくユニークな作品など、高度成長期を完結させた日本のエネルギッシュさを鮮やかな色彩で表現した。とりわけ、太陽の塔に太陽の塔の制作過程が投影されたのは印象的であった。

映像作品によって次々に姿を変える太陽の塔の前では、未来記憶圏への呼びかけとして、吉川豊人氏によるライブパフォーマンスをランダムに開催し、いつ鳴り出すかわからな



写真1 <夏>開催の様子

い“目覚まし時計”として来場者を魅了した。

また、映像と音響によって表現された幻想的な世界に身を置くことで、来場者に太陽の塔への想いを募らせてもらい、メッセージを投稿してもらったこととなった。投稿されたメッセージのほとんどが、「太陽の塔と私」というコンセプトに沿ったものであり、我々の企画意図が十分な理解のもと反映されたと考える。

実際に投稿されたメッセージ(抜粋)は以下の通り。

- ・はじめてなのにはじめてのきがしない
- ・クビレ無いね。あたしと一緒にかも。
- ・猫背やね。
- ・夏空の下で輝く明るい子
- ・なんでこわい顔してるの？

②作品構成<冬>

<冬>は、4日間の開催に加え、冬休みやクリスマスの時期ということもあり、<夏>開催時よりコンテンツを増加しての構成となった。特に、家族連れの来場が見込まれたため、子供にも楽しんでもらえるプログラムを加えることとした。

1. 「あなたの夢で太陽の塔をあたためよう。」

太陽の広場

<夏>に実施したシステムをそのまま利用し、太陽の塔を映像作品でライトアップするとともに、来場者から投稿されたメッセージを投影した。<冬>は投稿のテーマを「夢や希望」とし、それによって太陽の塔を元気付けるというコンセプトのもと実施した。

実際に投稿されたメッセージ(抜粋)は以下の通り。

- ・美しく生きたい。
- ・夢を語り合える社会になるべきだ
- ・もっとできる みんなの命が輝くこと
- ・もつとゆっくりした社会になってほしい
- ・生きている喜びを感じられるひとになりたい。



写真2 太陽の塔に投影されるメッセージ ©坂田貴広

2. 「未来へつづくプロムナードへ。」

東大路

工芸学科の学生たちによる作品を照明とともに設置した。ガラス工芸コース、テキスタイル・染織コース、陶芸コース、金属工芸コースの4チームに分かれてそれぞれの素材を活かした“光”を表現し、美しい未来へとつづく希望の道を創出した。全長約200メートルの灯りのともった回廊は、あたたかい雰囲気と静けさを醸し出した。



写真3 光のプロムナード ©坂田貴広

3. 「太陽の塔×めざましどけい。」

太陽の広場

＜夏＞開催時と同様に、太陽の塔の前方スペースにおいて、パフォーマンスをランダムに開催した。前回出演した吉川氏に加え、大阪芸術大学打楽器アンサンブル(演奏学科管絃打コース打楽器専攻生)の学生たちが力強いサウンドを響かせ、“夢をつむぐ心”を目覚めさせることを企てた。学生たちも経験することが少ない野外での演奏であったが、多くの来場者が演奏に聴き入ってくれた。



写真4 太陽の塔の前で演奏する学生たち

4. 「太陽の塔、の子機!？」

太陽の広場

太陽の塔の前の芝生広場に太陽の塔をモチーフとした小さい太陽の塔=子機を10体設置した。高さ約2メートルの木製で、直線により構成された次世代の太陽の塔である。来場者が内部に入ることができる構造となっており、紐

をひっぱると顔面に取り付けられたハロゲンライトが勢いよく光を放ち、同時に来場者の頭上から不思議な音が聴こえる仕掛けを施した。音は、あえてカセットテープを媒体とし、大阪万博・ドイツ館に参加していた現代音楽家 カールハインツ・シュトックハウゼン氏の作品を参照して作曲した作品を再生した。



写真5 子機を操作する来場者 ©坂田貴広

5. 「ななめ箱で眺める。」

上の広場

“ななめ箱”は、コンパネなどを材料として制作された立方体で、人が入ることのできる構造となっている。いつもとは違った角度で太陽の塔や景色を愉しむことができ、さながら賑わう会場のなかにあられた私部屋のように、時間や喧騒から逃れて思索できる小さな空間として設置した。太陽の塔との対峙の仕方に多様性を持たせ、正面から向き合うだけでない太陽の塔の感じ方を提案した。

6. 「シンドウさんで太陽を。」

太陽の広場

全自動お絵描きメカ「シンドウさん」と称する組み立て式玩具を来場者とともに制作し、円形キャンバスに数台を起動させ、太陽の絵を描いた。太陽の塔を応援する気持ちを込めて組み立てをし、太陽を描いた後は、各々持ち帰ること

ができる。次代を担う子供たちの参加を促したこのワークショップはすこぶる人気をはくすことになり、たくさんの家族が楽しんだ。



写真6 「シンドウさん」ワークショップ ©坂田貴広

3. まとめにかえて

本企画において、プロデュース面から重要視したことのひとつに、歴史的遺産を保存することへの思考転換⁽⁴⁾がある。約40年前に実施された万博に関わる各種企画は、万博記念公園現地での開催、メディアでの特集を問わず、おおよそ当時を振り返り、懐かしむというコンセプトが大半を占める。万博マニアが喜ぶような企画が繰り返されているばかりでは、万博を知らない世代にとっては、単なるタイムスリップで終わってしまう。いつまでもそのスタイルを通して、今後、次第に市民は「万博」という歴史から離れていってしまうのではないかと考えられる。

今回、太陽の塔をモチーフに企画を構成するにあたり、当初は万博のアーカイブ映像を多用した作品にするというアイデアもあったが、太陽の塔をどう捉えているのかという問題に対して、世代間のギャップがあることに気がついた。子どもに万博に行った世代は、今でも太陽の塔をロケットやロボットを彷彿とさせる未来的なモチーフとして捉えている一方で、若い万博を知らない世代は、岡本太郎氏の

作品と知ってはいても、その存在に何か“違和感がある”といった意見があった。特に、緑豊かな広大な土地にポツリと佇む姿は、エネルギーという言葉にはそぐわない、どちらかというと寂しいといったイメージがあるようだった。

このように、万博を知らない世代にとって、万博は過去であり、遺産であることから、歴史を振り返るタイプの企画ではなく、万博を未来へとつなげ、歴史を活かすタイプへの転換が今後は求められていくのではないかと思った。万博記念公園、及び太陽の塔は単に保存されるだけでなく、今を生きるシンボルとして活用されていかなければ、人々の関心は薄れる一方だと感じる。近年では、万博記念公園において、様々な催しが開催されているようだが、単なるライトアップにとどまらない、万博記念公園と太陽の塔の将来像を意識した企画が必要であろう。

加えて、70年代を振り返る事業においては、懐かしい思い出にひたることもあってよいが、若い世代に向けて明るいメッセージも発信して欲しいものである。高度成長期における日本の躍進と、それを支えた人々の誇りを讃えつつも、この混沌とした時代に生きている若い人たちに希望を持って進んでいける社会の眼差しがなければいけない。極端な、「70年代はよかった」「今の若者はダメだ」という一方的な見方をしても、実際に現代(いま)を生きている若者や子供たちに何も罪はない。もっと現代(いま)を生きていることに自信をもってもらえるようなメッセージを込めた企画が求められており、それは、万博記念公園のような“未来記憶圏”でこそ実施されるべき性質のものではないかと考えられる。

おわりに

日本万国博覧会が開催された70年代当時、今のように携帯電話が普及する時代を万博は予感させていた。しかし、これほどまでに身近なツールになるとは、想像できなかったらう。本企画において、当時の“夢”の一部を利用したシステムを表現として活用し、同じく“夢”の象徴であった太

陽の塔にメッセージを映し出すことができたのは、実に感慨深いことである。

今回の試みが、場の記憶を活かし、更なる未来へとつながる夢の一端を担えたとしたら、これほどうれしいことはない。アートプロジェクトが、アートだけでなく社会をも切り拓く可能性を秘めていることを確信させる機会となり、ますます意義深さを感じざるを得ない。

最後になったが、本稿に掲載した写真は坂田貴広氏によるものと、本学広報用に撮影されたものを使用させていただいた。編集については、本プロジェクトのコンセプトエディターをともに務めた青絲亭の水谷フミカ氏の手を煩わせた。心から謝意を表す次第である。また、「EXPO'70」が催された刺激的かつ、興味深い場所でこのアートプロジェクトを実施する機会を与えてくださった学塚本学院 大阪芸術大学 塚本邦彦理事長・学長、(学塚本学院 亀谷眞一常務理事をはじめ、日本万博記念機構及び協力企業に対し、深く感謝したい。

註

- (1) “人類の進歩と調和”をグランドテーマとした大阪万博は、国民にすばらしい未来のイメージを演出し、憧憬をいだかせようとした国家レベルのドリームプロジェクトであった。橋爪紳也氏も「未来の可能性を見せるのが万国博の精神…中略…これから普及するだろう商品や技術、さらには生活の仕方を実験的に示すのが博覧会の精神であるとするならば、70年万博はまさに、そういう夢があふれている場だった」(橋爪紳也「博覧会都市の一世紀」『大阪人』<第54号/特集 万博30年>財大阪都市協会 2000 P21)とその特質をまとめている。
- (2) 単なるイベントとして愉しむのみならず、アートプロジェクトとして、テーマに対し、共に対峙する濃密な時間を創出することにこだわった。また、参加型の手法を核とすることで、来場者が鑑賞者でありながら、同時に表現者になり得るあり方が大切であると考えた。多様な視点や感じ方を作品へとフィードバックさせるためにも来場者の思索は必要不可欠なものとなる。それは制作者サイドを触発させることにも繋がるのである。
- (3) ㈱デジモジ社モジメッセシステム。鬼塚真社長は同社のホームページ(ニュース情報)でこの企画を紹介し、“つぶログのデジ

ル掲示板”的機能を果たすとコメントしている。

- (4) アートプロジェクトを展開させる場として、歴史遺産の存在に注目したことがある。その際に「歴史遺産を過去のものとして埋没させず、現代～未来に拓くためのイマジネーションを促す」(谷悟「社会に開かれた芸術のカーアートプロジェクトの可能性―」『塚本学院教育研究補助費研究成果報告書 15巻』(学塚本学院 2008 P64)と言うこともアートプロジェクトの力の1つであるとまとめたことがあった。今回はその考え方に立脚して実践を試みた。

参考

- (1)制作・運営に関わったスタッフ

□制作:大阪芸術大学万博公園アートプロジェクトコミティ
総合ディレクター

谷 悟(芸術計画学科 准教授)

クリエイティブディレクター

アサオヨシノリ(映像学科 専任講師)

映像制作

常川 篤史(映像学科 卒業生)

藤本 亜弥(大阪美術専門学校 卒業生)

映像学科、キャラクター造形学科の学生有志

大阪美術専門学校の学生有志

工芸制作指導

伊藤 隆(工芸学科金属工芸コース 教授/学科長)

山野 宏(工芸学科ガラス工芸コース 教授)

工芸学科 ガラス工芸コース、テキスタイル・染織コース、陶芸コース、
金属工芸コースの技術指導員・副手のみなさん

工芸制作

工芸学科 金属工芸コース、ガラス工芸コース、陶芸コース、
テキスタイル・染織コースの学生有志

演奏指導

奥原 光(演奏学科 教授)

演 奏

大阪芸術大学打楽器アンサンブル

(演奏学科 管弦打コース打楽器専攻生有志)

運営スタッフ

芸術計画学科 学生有志

ななめ箱制作

ななめら (通信教育部建築学科、同デザイン学科生 学生有志)

ななめ箱協力

建築学科 学生有志、ほか

子機・シンドウさん制作

アストロ温泉 (大学院芸術研究科芸術制作専攻生)

子機音響

竹下 士敦 (大学院芸術研究科芸術制作専攻生)

イルミデザイン

大野 英昭 (大阪芸術大学大学院芸術制作研究科修了生)

協力

佐藤 貴雄 (映像学科 非常勤講師)

永田 和久 (通信教育部映像学科 非常勤講師)

田口 雅一 (建築学科 准教授)

□編集:青絲亭

コンセプトエディター

水谷 フミカ

谷 悟

(2) 報道実績

①万博公園アートプロジェクト「未来記憶圏からの目覚め 夏」

□新聞

2009.8.8 「毎日新聞」(朝刊)

2009.8.8 「産経新聞」(朝刊)

2009.8.8 「読売新聞」(朝刊)

2009.8.9 「朝日新聞」(朝刊)

2009.8.15 「大阪日日新聞」(朝刊)

2009.8.7 「共同通信」配信

(※以下の本誌及びWeb版に掲載)

北海道新聞、河北新報、山形新聞、北日本新聞、下野新聞、東京新聞、山梨日日新聞、富山新聞、福井新聞、静岡新聞、中日新聞、岐阜新聞、京都新聞、大阪日日新聞、神戸新聞、徳島新聞、西日本新聞、中国新

聞、山陽新聞、山陽中央新報、長崎新聞、大分合同新聞、熊本日日新聞、中日スポーツ、デイリースポーツ)

□Web版ニュース

2009.8.7 「YAHOO JAPAN ニュース」(産経新聞配信)

2009.8.7 「MSN 産経ニュース」(産経新聞配信)

2009.8.7 「さきがけon The Web」(共同通信配信)

2009.8.7 「Meet ME」(産経新聞配信)

2009.8.7 「47NEWS」(共同通信配信)

2009.8.9 「goo ニュース」(朝日新聞配信)

②万博公園アートプロジェクト「未来記憶圏からの目覚め 冬」

□新聞

2009.12.20 「読売新聞」(朝刊)

2009.12.20 「産経新聞」(朝刊)

2009.12.21 「朝日新聞」(朝刊)

2009.12.20 「共同通信」配信

(※以下の本誌及びWeb版に掲載)

北海道新聞、岩手日報ニュース、東奥日報、河北新報、福島民報、福島民友新聞、下野新聞、茨城新聞、東京新聞、山梨日日新聞、新潟日報、北日本新聞、北国新聞、富山新聞、福井新聞、静岡新聞、中日新聞、岐阜新聞、京都新聞、大阪日日新聞、神戸新聞、四国新聞、徳島新聞、高知新聞、西日本新聞、中国新聞、山陽新聞、山陰中央新報、長崎新聞、大分合同新聞、熊本日日新聞、宮崎日日新聞、スポニチ、スポーツ報知、デイリースポーツ、東京中日スポーツ、中日スポーツ)

□Web版ニュース

2009.12.21 「asahicom」<動画>(朝日新聞社配信)

2009.12.20 「大阪ニュース eo ニュース」(共同通信配信)

2009.12.20 「47NEWS」(共同通信配信)

2009.12.20 「さきがけOn The Web」(共同通信配信)

□電波媒体

2009.12.22 「関西ラジオワイド」(NHK 大阪放送局)

2009.12.16 「ニューストゥナイトいいおとな」(ラジオ大阪)

2009.12.23 「NEWSゆう+」(朝日放送/年末特番に映像放映)

DVD「太陽の塔」(関西テレビ/制作取材)

③万博公園アートプロジェクト「未来記憶圏からの目覚め」大阪万博40周年特集記事

□新聞

2010.3.11 「産経新聞」(夕刊)

